

[研究ノート]

万葉集の理科学的考察 (III)

——^{シイ}椎の葉に盛る——

藤 田 秀

- <目 次> §III-1 はじめに
§III-2 激動の 28 年間
§III-3 浜松が枝を引き結び
§III-4 椎の葉に盛る
§III-5 おわりに

§III-1 はじめに

物理屋の友人に、古代史、あるいは万葉集を語る位つまらぬことはない。彼等は、全然興味がないのである。いやそもそも、彼等は歴史ということに関心が薄い。

歴史を学ぶということは、単なる物識りや、懐古趣味のためではない。「歴史とは過去と現在の対話である」。「過去が現在と対話するさいにも、その根底に現在への批判的姿勢がたもたれていてこそ、生き生きした対話がおこなわれるであろう。なぜなら、現在への批判がないところにはつねに、本来歴史的なるものの絶対化や現存するものの合理化、さては自己礼讃が生まれるからである」(「科学と歴史」広重徹著、みすず書房。アンダーラインは著者)。

筆者の手許に、古い本が2冊ある。1冊は、倉田百三著、「大化の改新」(紀元社、昭和19年5月20日発行)である。ここでいう倉田百三とは、勿論、「愛と認識の出発」(通称デッパツと読む)、「出家とその弟子」等で有名な、倉田百三その人である。旧制高校卒の読者の方々には、懐しい名前であろう。今ひとつは、森岡美子著、「万葉集物語」(金蘭社、昭和15年12月18日初版発行、同18年2月21日、第8版発行)である。いずれも、吉祥寺の古本屋の店先で、雑沓の埃りを浴びながら、十把一っからげに売られていた中から、探し出して来たものである。発行年月日から判るように、両著とも、太平洋戦争の真最中に発行された本である。殊に、倉田百三著の方は、品質の悪い仙花紙で、見るも無残である。その「後記に代へて」と題する、編集者の記にはこうある。「大化の改新を主として日本精神美の雄渾優美天真等の側面より捉へ、日本精神の高揚と歴史的使命の自覚とを作意に盛らうとしたこの小説はしかし」(出版に当り多少の削除や用語の訂正は避け得なかった)。一方、「万葉集物語」の方の序にはこうある。「大君の醜^{シコ}の御楯^{ミタテ}となり(振仮名は著者)、海行かば水づく屍、山行かば草むす屍とならむことを誓った、私達の祖先の萬葉人の天子さまに對する赤心は、どんなに幼いものたちの心に深い感銘を與へることでせう」。これこそ、「本来歴史的なるものの絶対化、現存するものの合理化、自己礼讃」というものであろう。こ

ういう時代に、なってもらいたくないと思っているのは、著者一人ではあるまい。であるからこそ、歴史を学ぶのである。

§III-2 激動の28年間

今回の主題に入る前に、その歴史的背景について、説明しておきたい。西暦645年から、672年にいたる28年間を、仮に、「激動の28年間」と名付けたい。西暦645年は、皇極4年、あるいは、大化元年と呼ばれている。その年号からも判る通り、大化の改新のあった年である。一方、672年の方は、天智天皇(元中大兄皇子)の亡くなった翌年で、ここに古代史上の超大事件、任申ジシシの乱が起こっている。任申の乱とは、洋の東西を問わず、よくある、叔父・甥の権力争いによる、内戦のことである。天下は、近江朝と吉野朝とに分かれて、戦ったのである。この28年間に登場する、3人の男性について語りたい。それは、1、ナカノオウエノオウジ中大兄皇子、2、アリマノミコ有間皇子、3、ソガノアカヒ蘇我赤兄、である。

中大兄皇子が、大化の改新のクーデターを起こし、蘇我の入鹿を倒した時は、20歳であった。この時の天皇は、中大兄皇子の実の母で、皇極天皇という女帝である。クーデターによって、皇極天皇(52歳)は退位し、位を弟の孝徳天皇(50歳)に譲った。中大兄皇子から見ると、叔父にあたる。皇極天皇は上皇となった。孝徳天皇の後は、ハシヒト間人皇后という。これは、中大兄皇子の同母妹である。従って、孝徳天皇と間人皇后の間も、叔父・姪ということになる。孝徳天皇と間人皇后の間には、子供がなかった。一方、孝徳天皇には、他に阿部倉梯麻呂アベノクラシマロの娘、阿部小足媛アベノオタラシヒメがあつて、この間に出来た子供が有間皇子アリマノミコである。有間皇子は、孝徳天皇のたった一人の子供で、大化の改新の年には、6歳であった。中大兄皇子20歳、有間皇子6歳、従兄弟同士、ということになる。6歳の有間皇子が、20歳の中大兄皇子のことを、どう思っていたかは、判らない。凄いことをする、怖い人だと思っていたかも知れないが、記録はない。有間皇子が、大化の改新について、無関心でいた筈はない。実の父が天皇に即位したのである。当然、急に父の身边は慌しくなったであろう。このことに、一粒種の6歳の男の子が、気が付かぬ筈はない。それどころか、やがて大化元年の末に、都は飛鳥の地を

離れ、難波^{ナニワ}へ遷都するのである。その慌しさは、並大抵ではあるまい。当然、6歳の男の子にも、深い印象を与えたであろう。

蛇足になるが、古代においては、何故こうしょっちゅう遷都するのであるか、という疑問が湧く。これには、著者のある知人が、直載に答えてくれた。それは、古代の都には、下水設備がないので、汚水が溜り、疫病が発生するからだ、というのである。成程。答になっているかどうか判らないが、一説ではあろう。

そもそも、大化の改新はなかったという話がある。日本書紀の編者の、作りものだというのである。これは勿論、クーデターのことを言うのではない。新政権が、次々に発布した法令や詔勅が、日本書紀の編者の創作だというのである。その話は、あまりに専門的になるので、ここでは省略したい。とにかく、一方では貴族の権限を弱め、他方では天皇の権威をたかめ、古代国家の建設に努めた。これらの諸法令は、大化元(645)年、大化2(646)年の2年間で、大体出つくしている。新政権が、いかに事を急いでいたかが判る。大化5(649)年になると、早くも、大化の改新の、前途を卜するような事件が起きた。左大臣阿部倉梯麻呂^{クラハシマロ}の死である。これは、有間皇子の母方の祖父に当たる。途端に、右大臣蘇我石川麻呂に、謀叛の動きがあると言って、中大兄皇子は兵を送って、石川麻呂邸を囲み、自殺に追いやった。左大臣の死から、僅か8日後のことであった。大化の改新に次いで、中大兄皇子の周りに、また血と政治的陰謀の臭いが立ちこめた。

明けて大化6(650)年、長門の国司が白い雉を献上した。これを吉兆と喜んで、年号を白雉^{ハクチ}と改号した。白雉4(653)年になると、中大兄皇子と孝徳天皇との不和は、決定的となった。これも、史上よくある、叔父・甥の対立である。中大兄皇子は、難波宮^{ナニワノミヤ}を捨てて、大和に引揚げてしまうのである。これには、母、皇極上皇、弟、大海人皇子^{オホアマノオウジ}(後の天武天皇)をはじめとして、妹、間人皇后^{ハシヒト}までが、夫である孝徳天皇を見捨てて、一行に加わった。この時、有間皇子はどうしたのであろうか。思うに、父孝徳天皇と一緒に、難波宮に留ったのではあるまいか。すでに、14歳という多感な年頃になっていた。明けて白雉5(654)年、孝徳天皇は孤独の中に、遂に難波宮で亡くなった。有間皇子は、傷心を抱いて、大

和に引揚げたものと思われる。15歳であった。母、小足媛^{オガラシヒメ}のことについても、記述はない。

ここで、古代史上の大きな謎が生じる。それは、当然即位すべき筈の中大兄皇子が、即位しないのである。誰が見ても、中大兄皇子の番であるが、意外にも、母皇極上皇がカムバックして位についた。日本史上、初めてのケースである。中大兄皇子30歳、有間皇子16歳であった。著者の計算に間違いがなければ、皇極上皇は61歳であった筈である。これを斉明天皇といい、年号は斉明元(655)年となった。

斉明天皇が重ねて位についた、この謎を解く、大変大胆な仮説がある。少し長くなるが、ここに引用したい。「中大兄皇子は叔父の孝徳天皇から皇后を奪ったのである。母を同じくする中大兄と間人皇后とのあいだでそのようなことはありえない、というのは現代人の常識にすぎない。はらちがいの兄妹(異母兄妹)間の結婚は、敏達天皇と推古天皇とがそうであったように、堂々とおこなわれているのだから、同母兄妹間の結婚も古代ではありうることであろう。そう考えれば間人皇后が孝徳天皇をすてて大和へはしった疑問はとける。もちろん同母の兄妹の結婚が古代でもタブーであったことは事実だ。允恭^{インゴウ}天皇の皇太子軽皇子^{カルノオウイラツメ}が、同母妹の軽大郎女と結婚したために皇太子の地位をうしない、皇位につくことができなかつた話は、たんなる伝説かもしれないが記紀に伝えられている。中大兄も間人皇后との結婚を表むきにはできなかつた。かれがこののちも長く皇太子のままにいるのはそのためではないか、というのが吉永氏の解釈である。天皇になれば皇后をきめなければならないが、それができないのである。その証拠に、中大兄が正式に即位するのは間人皇后がなくなってからではないか、と吉永氏は論ずる。なるほど、間人皇后が死ぬのは665年(天智称制4年)、天智天皇の正式即位は668年(天智称制7年)である。いわれてみると、なぜ中大兄は23年もの長い間皇太子のままにいたか、という古代史の疑問もとけるのである」(「日本の歴史」2、古代国家の成立。直木孝次郎。中央公論社)勿論この仮説は、これだけの根拠で出されているのではない。間人皇后の歌と見なされるものが2首、孝徳天皇の歌が1首、万葉集に出ている。それらの歌の解釈を巡って、出されて来た仮説であるが、これ以上詳しいことは、ここでは省略し

たい。

それはさておき、遂に運命の年、斉明 4 (658) 年がやって来る。このくだりは、日本書紀に詳しい。簡単に御紹介すると、11月3日、有間皇子は蘇我赤兄ソノガノアカニにすすめられて、謀叛に加わる。中大兄皇子と斉明天皇とは、紀の湯に出かけていて、留守である。ところが、5日の夜、有間皇子は邸にいた所を、突然蘇我赤兄の軍兵に囲まれて、捕まるのである。してやられた、という他はない。

9日には、紀の湯で中大兄皇子の審問をうけた。中大兄皇子が、「何の故か、謀叛ミカドカクフけむとする」と問い詰めた。有間皇子は「天と赤兄と知らむ。吾アヌは全フレら解モハらず」と返答した、と日本書紀には出ている。そして、2日後の11日には、藤白坂で絞首されて死んだのである。謀叛の相談をもちかけられてから、たった8日後であった。いかにも手際が良すぎる。はじめからの計略であろう。有間皇子19歳であった。この時、捕って紀の湯での審問につれてゆかれる途中で、詠んだ歌が2首、万葉集に出ている。今回は、この有名な2首について、私見を述べたい。

さて、有間皇子は、あっけなく殺されてしまったが、生き残っている人々には、どんな運命が待っていたか。ついでにもう少し述べておきたい。政治的ライバルの、有間皇子がいなくなって、天下は泰平になったであろうか。そうはゆかなかった。有間皇子が死んで2年後の、斉明 6 (660) 年、百済が亡んだ。唐と新羅の連合軍に、攻め亡ぼされたのである。多数の人が、日本に亡命して来た。明けて斉明 7 (661) 年、斉明天皇と中大兄皇子は、軍を北九州に進めた。ところが、7月には、斉明天皇が北九州で亡くなった。今度こそ、中大兄皇子が即位しなければならないが、彼は、白い喪服を着て、皇太子のまま政治をとった。中大兄皇子、第2の謎である。衣の色を位によって染め分けた中であって、白い喪服のままというのは、いかにも異様であったであろう。これを天智称制という。天智称制 2 (663) 年 8 月、日本軍は、朝鮮半島の白村江ハクサンギョウで、大敗北を喫した。唐と新羅の水軍の前に、日本軍は壊滅的打撃を受けたのである。「須興トキキム之際マに、官軍敗続ミイクサヤブれぬ。水に赴きて溺れ死ぬる者衆し」と日本書紀は述べている。かくて、9月には朝鮮半島から兵を引揚げ、明くる称制 3 (664) 年 1 月には、中大兄皇子は、飛鳥へと逃げ帰るのである。続く称制 4 (665) 年、遂に間人皇后が

亡くなった。中大兄皇子 40 歳のことである。弱り目にたたり目と思ったことであろう。40 歳という年を、彼はどう思ったであろうか。すべては、20 歳の時に蘇我入鹿を倒してから、僅か 20 年間の出来事であった。

2 年後の 42 歳の時に、中大兄皇子は、都を近江へと移した。その理由ははっきりしない。中大兄皇子、第 3 の謎である。万葉集巻 1、第 29 首で、人麻呂も、「いかさまに思ほしめせか」と歌っている。古代においても、理由不明であったのか、あるいは言うのをはばかる訳があったのであろう。そして、遂に即位して、天智天皇となった。近江遷都の謎は、国防上の理由であろうと言われていた。勿論、それもあつたであろう。しかし、いくらかは、間人皇后の思い出から逃れたい、という意志もあつたのではないかと思われるが、いかがなものであろうか。4 年後の 46 歳の時(671 年)、遂に天智天皇は近江で亡くなった。近江遷都から僅か 4 年後のことであつた。この時、蘇我赤兄は左大臣になっていた。

天智天皇の次の皇位継承をめぐる、実子である大友皇子と、実弟である大海人皇子の間で、天下を二分した叔父・甥の内戦となった。任申の乱である。日本書紀には、「旗織野を蔽し、埃塵天に連なる。鉦鼓の声数十里に聞ゆ。列弩乱れ発ちて、矢の下ること雨の如し」とある。もともと、この辺の記述は、後漢書からの転載だと言われている。日本書紀の著者達もいいかげんなことをするものである。しかし、著作権などというものが無い時代だから、やむを得まい。戦いは、近江朝の敗北となる。大友皇子は首をつて死に、蘇我赤兄は捕えられて、流罪となった。有間皇子を陥れてから、僅か 14 年後のことであつた。大化の改新からは、28 年がたっていた。

§III-3 浜松が枝を引き結び

前述したように、有間皇子が、斉明 4 (658) 年 11 月 9 日、紀の湯での審問に引っぱり出される前に、藤白の坂で詠んだ歌がある。

アリマノミコ
有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首

2-141 イワシロノ 磐白乃 ハマツガエヲ 濱松之枝乎 ヒキムスビ 引結 マサキクアラバ 真幸有者 マダカエリミム 亦還見武

岩代の浜松が枝を引き結び 眞^マ幸^{サキ}くあらば またかえり見む

意味はさほど難しくない。おまじないに、松の枝を結び合わせ、無事であったら、帰りにまた立ち寄って、この松を見よう、というのである。

しかしながら、ここに1つの問題がある。これは、日本語の構造に関係している。一体この「浜松が枝」は、1本の木に生えている、2本の枝を結ぶのか、それとも、2本の松の木に生えている枝を、1本ずつ引っぱって来て、それらを結び合わせるのか、である。英語で言えば、Binding the branches of a pine tree, なのか、Binding the branches of the pine trees, なのかである。ここでいう「引き結び」というのは、単に枝と枝とをからめ合わせて、ということではあるまい。恐らく、革紐を使ってしっかりと結びつけて、ということであろう。筆者の家のそばに、都立の公園があり、松が沢山生えている。時々散歩に行つては、松並木を眺めて、この問題を考えてみるのだが、依然として結論が出ない。日本語に、“a”と“the”の区別などいらない、前後の文脈で、いずれかは明白になる、と常日頃主張している筆者も、短歌には困った。全くお手上げである。

1本の松の木に生えている、2本の枝を、紐を使わずにからめ合わせて、という解釈が無理なことは、すぐに判る。松の木の枝は、ほぼ直角ごとに生えていて、とても、からめ合わせるという程には近付いて生えてはいない。しかも、枝はそんなにやわらかくない。しかし、革紐を使ってとなると、かなり無理ではあるが、互に引っぱって来て、結び合わせられぬこともない。解説書の中にも、このことに触れているものは、1つもない。全く困ったことだ。理由はないが、筆者は、別々の木に生えている枝を、1本ずつ引寄せて来て、革紐を使って互に結び合わせたのではあるまいか、と思う。野原の中で、草の株と、他の株とを結び合わせるいたずらは、子供の頃よくやった。知らない人が、足をひっかけて、転ぶようにするためである。今、このいたずらと、万葉集の歌とを、同列にあつかう訳にはゆかぬが、隣りあった2本の木の枝を結びあって、とする方が、祈りが込められている様に思われるのである。

§III-4 椎の葉に盛る

続く第2首。これ位論争のはげしい歌も、珍しいであろう。

2-142 イエニアレバ ケニモルイヲ クサマクラ タビニシアレバ シノハニモル
 家 有 者 筍 尔 盛 飯 乎 草 枕 旅 尔 之 有 者 椎 之 葉 尔 盛

家があれば 筍に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る

まず通り一遍に解釈すると、家にいる時は筍に盛る飯を、旅に出ているので、椎の葉に盛ることだ、というのである。これで済んでいけば、天下泰平である。面白くもおかしくもない。しかしながら、ここに論争が起こった。それは、「椎之葉尔盛」から始まった。椎の葉は小さくて、幅2cm、長さ3cm位しかない。とても、椎の葉に盛って、飯は喰えない、という所から始まったのである。これをスダジイという。他に、マテバシイというのがあって、こちらの葉はやや大きい。それでも、幅3cm、長さ8cm程である。これでも御飯を食べるのには不便である。従って、この歌は食事をする歌ではない、旅の無事を祈った、お祈りの歌である、というのである。これを「神饌説」という。

食事説派も負けてはいない。さる有名大学の一流教授は食事説である。彼は、葉は小さくても、沢山重ねて、「ボーン」と飯を盛れば食べられると主張する。そこで著者は、大枚300円を払って、「神代植物公園」に入ってみた。そして、つらつらと、スダジイとマテバシイの枝を眺めてみた。その結果は、全くノーである。理由は、シイの葉は、平面的に生えているのではなくて、こんもりと立体的に生えているからである。従って、枝を重ねれば重ねる程、葉っぱの山が出来てしまって、とても平面的な皿にはならないからである。かの有名教授は、一度も、シイの葉の実物を眺めたことがないに違いない。葉は、重ねれば重ねる程、こんもりした山になってしまって、「ボーン」と飯を盛るどころではないのである。

それでは、「神饌説」に従うとしても、一体何で、こんな小さな椎の葉に盛るのであろうか、という疑問が湧く。著者の近所に、諏訪神社というのがあって、

祭りが近付くと、榊の枝を供え、枝の股の所に、チョッピリと飯を盛りつける。これは、何のまじないかと思っていたが、とにかく、神社には、テコ盛りの飯を供えるのでないことだけは、判っていた。

ところが、ついに解答の得られる日が来た。それは、1984年9月14日の毎日新聞である。記事にはこうある。「墳墓の築造年代を推定する石棺などの埋葬品は見つかっていないが、周溝の全域から土器片、ミニ(ア)チュア土器(直径3センチ、高さ6センチ)などが多数出土。これらの多くは、①口の部分に波状紋が付いている、②底部がやや丸みを帯びている——などから、大阪府豊中市の庄内遺跡で出土したのと同じ弥生時代末期(3世紀末)の土器とわかり、この前方後円墳は、弥生時代末期から古墳時代前期にかけて築造されたものと推定した。」

そうだ。我々はすっかり、盲点を突かれていたのだ。筈^{ケニモルイラクサマクラ}尔盛飯乎草枕、というので、てっきり当時の人が食事に用いる「筈」と思っていたのだ。そして、やれ銀製の筈があるの無いのと、下らぬ事に議論が脱線していたのだ。今日でも、仏壇の茶碗には小型のものを使っている。しかもそれを「茶碗」という。ここでいう「筈」というのも、「我々が食事に使う筈」ではなくて、「神様に供える小さな筈」だったのだ。出土したミニチュア土器が、その証拠である。この土器の年代が3世紀末とすれば、有間皇子がこの歌を詠むまでに、400年からの伝統があることになる。当時の人は、言われなくても、この場合の「筈」が、小型のものであったことが、判っていたのであろう。それで、その筈に一番近いサイズをもつ、椎の葉を選んだのであって、手当たり次第に、椎の葉にしたのではないのである。神様には、小型の筈で供えるのが本当なのだが、旅空で仕方がないので、3cm×2cmの椎の葉ですませます、ということなのだ。ミニチュア土器が多数出土したということは、当時すでに、「神饌用」の小型の筈が、沢山あったという証拠である。一体、古代において旅に出るとき、自分の飯碗を持ってゆかぬ者はないであろう。ところが、「神饌用」の筈までは持って来なかった。今ここで急に思い立って、審問の無事を祈るのである。仕方がない。3cm×2cmの椎の葉で間に合おうというのである。散々議論されていることなので、これ以上多くを語りたとは思わぬが、こうして、2首とも神饌の歌として、はじめて、前書の筋が通るのである。「紀の湯へ護送される旅中

のわびしい食事を詠むものと解されている」というのでは、真に迫るものがない。自分の運命に対する、おののきがない、というべきであろう。

§III-5 おわりに

食事説派の著名な大学教授は、著者の知人が、「椎の葉のような、小さな葉で、どうやって食事をするのですか」と質問すると、「オ前ハ医者ニデモナツテ、隨筆デモ書ケ」と、ハスッパな返答をしたという。何という不真面目な返答であろうか。こういう手合が、万葉集を食食物にしているのである。憤慨に耐えない。

ついでに、紀の湯での審問のことについて補うと、有間皇子は、即座に死刑にはならず、放免されて帰りかけた。ところが、藤白坂まで帰った時に、恐らく騎馬に乗った追手がかかり、これによって絞首されて死ぬのである。この事件は、当時としても、政治的陰謀として、皆の同情を集めていたらしい。万葉集巻2の挽歌の所には、有間皇子の歌に続いて、4首の挽歌が出ている。

^{ナガノイミキオキマロ} 長忌寸意吉麻呂、^{カナムセ} 結び松を見て哀しび咽ぶ歌二首

2-143 ^{イワシロノ} 磐代乃 ^{キシノマツガエ} 崖之松枝 ^{ムスビケム} 将結 ^{ヒトハカエリテ} 人者反而 ^{マタミケンカモ} 復将見鴨

磐代の岸の松が枝結びけむ 人はかえりて また見けんかも

2-144 ^{イワシロノ} 磐代之 ^{ノナカニタテル} 野中尔立有 ^{ムスビマツ} 結松 ^{ココロモトクズ} 情毛不解 ^{イニシエオモホユ} 古所念

磐代の 野中に立てる結び松 情も解けず 古思ほゆ

そして第3首は、有名な山上憶良の歌である。

2-145 ^{ツバサナス} 鳥翔成 ^{アリガヨイツツ} 有我欲比筒 ^{ミラメドモ} 見良目杼母 ^{ヒトコソシラネ} 人社不知 ^{マツハシルラム} 松者知良武

翼なす あり通いつつ 見らめども 人こそ知らね 松は知るらむ

大宝元年辛丑、紀伊国に幸す時に結び松を見る歌一首(柿本朝臣人麻呂歌集

に出ず)

2-146 ノチミト 後將見跡 キミガムスベル 君之結有 イワシロノ 磐代乃 コマツガウレヲ 子松之宇礼乎 マダミケンカモ 又将見香聞

後見むと 君が結べる磐代の 子松がうれを また見けむかも

以上の歌は、各歌によって作られた年代はまちまちである。例えば、2-143の歌は、事件後43年の歌と考えられている。人心は、今もそうであるが、40年もすぎると、真実を語るようになるものである。前述したように、夢中で激動の28年間を過ごして来た日本は、ここにいたって、静かに真実を語るゆとりを得たと言えよう。

ついでに述べておくと、2-145首の、山上憶良の作は、今日でも難訓とされている。殊に書き出しの、「鳥翔成」が読めないのが、有名である。「ツバサナス」と読んだのは、ほんの1例を上げたに過ぎない。万葉集には、今でも読めない難訓が沢山ある。理科生諸君。大いにコンピューターを駆使して、2000年の謎に挑戦してみてはいかがであろうか。

(1987年8月12日)

〔追 補〕

この原稿が出来上がってから、知人と、「結び松」の歌について、話しあう機会があった。知人の言うには、「浜松が枝を引き結び」というのは、2本の枝を結ぶのではなからうという。神社仏閣には、よくオミクジを売っている。オミクジを読んだ人が、それを枝に結んで帰る。丁度あのように、1本の枝にオマジナイを結ぶのだらうという。成程、そうともとれる。英語で言えば

Binding a branch of the pine tree,

である。この解釈は、「ひき結び」という、「ひく」という点に、いささか無理があるように思える。しかしながら、前記した通り、日本語には、“a”と“the”，単数複数、の区別がないのだから仕方がない。ここに、念のため、この説も併記した。

(1987年9月15日)